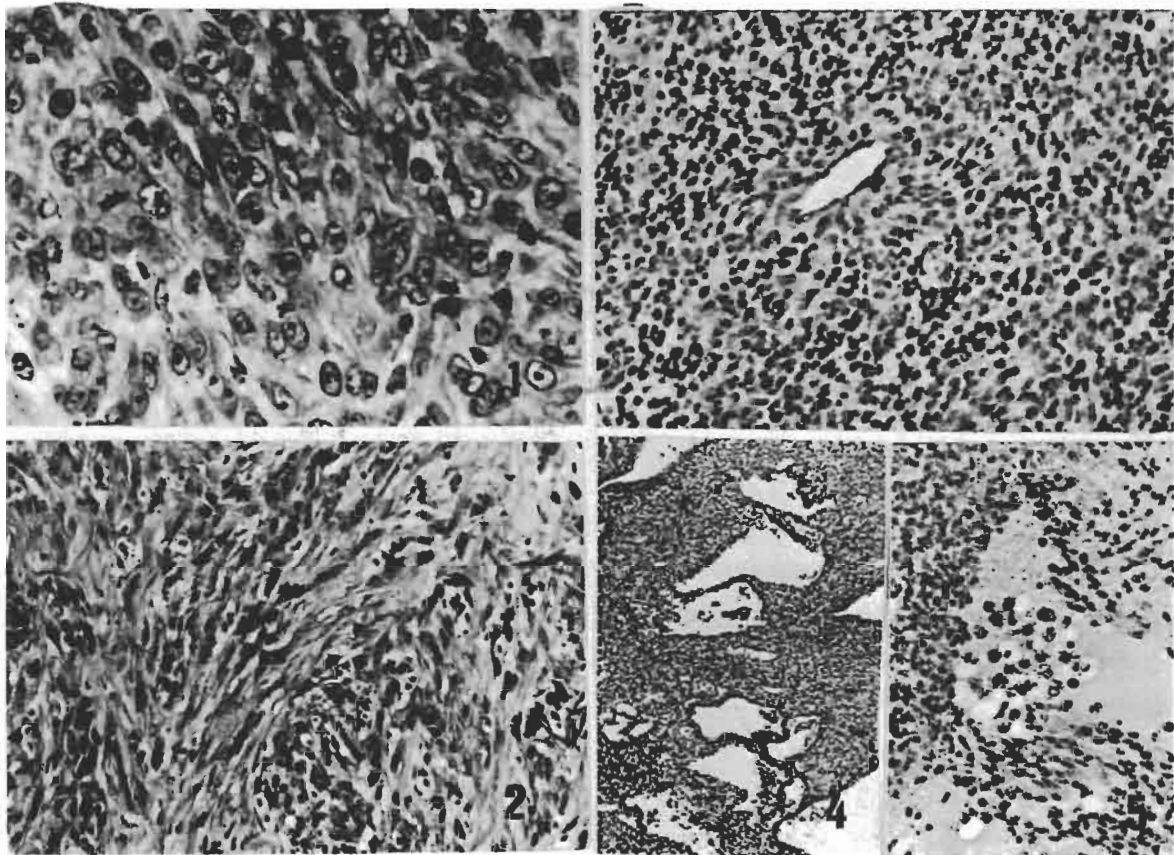


# ラットの子宮

日本生物科学研究所出題 第29回獣医病理学研修会標本No.515



**動物：**F344/DuCrj雌ラット，111週齢，体重313g。

**臨床的事項：**本例は日本チャールス・リバー株式会社より5週齢で入手し，当研究所のバリアーシステムを備えた動物室(室温 $23 \pm 2^{\circ}\text{C}$ ，湿度 $50 \pm 20\%$ )で，長期飼育試験に供された。109週齢時に膈から体外へ直径5mmの灰白色の腫瘤が突出し，次第に大きくなった。栄養状態が低下したために，軽麻酔下で放血致死させ，剖検した。

**剖検所見：**子宮頸部に直径15mmの線維走行のある充実した硬い結節(標本A)と子宮頸部から膈にかけて直径20mmの灰白色の軟結節(標本B)が認められた。両結節を含む子宮の重量は15.3gであった。

**組織所見：**標本AとBの腫瘍はそれぞれ独立して増殖しており，組織学的に性格の違う細胞から成り異なる診断名が与えられた。標本Aは，子宮内膜の深層で増殖し，子宮外膜に向かって結節を作っていた。腫瘍は細胞成分に富み，1個の核仁を持つ円形核を有する卵円形細胞の密な配列から成る部位(写真1，HE染色， $\times 360$ )と，長楕円形細胞から成り，細胞間に豊富な膠原線維が並走し，束状配列を示す部位(写真2，HE染色， $\times 180$ )があった。酵素抗体染色で，デスミン及びミオシンに弱陽性反応を示す細胞が散見され，筋芽細胞の特徴があった。また，腫瘍細胞は酸フォスファターゼ及び非特異的エステラーゼに対し陽性反応を示し，組織球の性格が伺われた。電

顕観察でも，細胞質に少数のリソゾームが確認された。標本Bは，子宮内膜に発生し，子宮内腔側に結節状に増殖していた。腫瘍はクロマチン豊富な卵円形核と，好酸性の細胞質を有する円形から楕円形細胞から成った(写真3，HE染色， $\times 150$ )。ジアスターゼで消化されるPAS陽性のグリコーゲンを含む細胞がしばしば認められた。電顕観察で，腫瘍細胞の細胞質に小顆粒及び脂肪滴が観察された。腫瘍組織の辺縁には，被包脱落膜の構造に似た，腫瘍細胞によって内張りされるシストがあり(写真4，HE染色， $\times 60$ )，その中には，ジアスターゼ抵抗性のPAS陽性の顆粒を持つgranulated metrial gland (GMG)細胞が存在した(写真5，HE染色， $\times 180$ )。**考察及び診断：**標本Aの起原細胞として，平滑筋細胞，線維芽細胞及び組織球が考えられた。しかし，細胞の由来を明確にし得なかった。これらは間葉系の細胞であることから，子宮内腔間質肉腫と診断した。標本Bは，グリコーゲン及び脂肪滴を含む脱落膜細胞の特徴を持った細胞から成り，かつ被包脱落膜に似た構造があり，脱落膜に出現するGMG細胞も観察された。これら特徴に基づき，脱落膜肉腫と診断した。従って，提出標本の診断は，「ラットの子宮における子宮内腔間質肉腫及び脱落膜肉腫の重複腫瘍」となる。